九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

古今六帖と千載佳句

清田, 伸一

https://doi.org/10.15017/12254

出版情報:語文研究. 21, pp. 1-11, 1966-02-28. 九州大学国語国文学会

バージョン: 権利関係:

.

清

 \coprod

はじめに

るにすぎない。 ・ 古今六帖と白氏六帖との影響関係については源順集との関係を述べ、古今六帖の「人」部と白氏六切いては源順集との関係を述べ、古今六帖の「人」部と白氏六媒介として平井卓郎氏が詳述しておられるが、「恋・雑思」に媒介として平井卓郎氏が詳述しておられるが、「恋・雑思」には原順の和名抄の

白氏六帖のその目録には

(宋本白氏六帖事類集による) 第六巻 宗親奴婢 第七巻 人状貌貴賤隠逸雑挙#

離れたものである。たしかに白氏六帖に於ける辞書的性格と古片鱗を見出し得ないことはないのであるが、それはあまりにものがあるように思われる。白氏六帖中に古今六帖の細い部類のがあるように思われる。白氏六帖中に古今六帖の細い部類の違、古今六帖と白氏六帖との相違という言葉で結論されないも思」の細目にあてはまるというものではなく、その相違は大きとあるにすぎず、その細目を検討してみても古今六帖の「恋・雑

いという点が存するのである。 の六帖のように和歌を類聚したものとのその内容に於ける相違は別としても部立にには大きなものがある。内容に於ける相違は別としても部立にには大きなものがある。内容に於ける相違は別としても部立にには大きなものがある。内容に於ける相違は別としても部立にには大きなものがある。内容に於ける相違は別としても部立にには大きなものがある。内容に於ける相違は別としても部立にには大きなものがある。内容に於ける相違は別としても部立にには大きなものがある。

的 句 の序には「…分¸部同¸類。方為,|日観集_T。…」とあるようにな されつ、あった。 ていた漢詩のその集に於けるところの分類意識は次第に細分化 ってくる。 たものが、文華秀麗集、 要素を含んだものであり、 は表面的にそれ程でもないが、 平安朝初期の漢文学全盛の頃宮廷の公的な文藻として通 日観集と同じく大江維時の撰になるところの千載佳 懐風藻から凌雲集の頃には作者別に分けられ 句題和歌、 後述する如く、 細部を見てみるとそれは日本 日観集へ進んでくると、そ 古今和歌六帖もこ

大部 春 古 ゃ な b 存 あ ła 0) つ む 春 今 細 を 0 か たちの ŋ ょ か 0) ₩. 六 O む は 0) 帖 雪(4) H ③ 部 月(0) 春(8) 日 ⑤ U (9) な ⑥ 月② H a) ā 四時部 時節部 天家部 時 24 時 四 大部 節部 時 節部 . 時部 一時部 Ŧ 部 載 三日3 春興③ 寒 春雪(1) 元日① 立春〇 早 暮 三月 (注六) 細 佳 春⑥ 食(2) 部 句 夏 夏 なこ 水 Ŧī. Б 神 ぅ 卯 更 あ 初 0 ゃ ま L 無 0) つ は 0) 1) (5) 献(10) 月 集8 日 ⑦ 月 ⑥ 月 ③ て (1) 花④ 夏① 衣② 四時部 四 四時部 四時部 時部 夏興⑨ 避暑(2) 納涼(3) HÝ 苦熱⑴ 首夏⑧ 夏(14) 秋 秋 九 な 駒 + 葉 t 秋 初 0 か ひ £ 朝 立. は て 10 月 夜(6) 月 ⑤ 4 . ₹ 夕 ③ 秋(2) B <u>(9)</u> 0 時節部 四 川時部 天象部 時 114 ĮΨ 一節部 |時部 時 時 節 部 部 部 重陽⑥ 幕 秋興の 十五夜 八月⑤ √. 暁 秋(19) 注 秋(16) 秋(15) 七 (13) 冬 ح ì 仏 L か L 神 初 る は < Ł 無 0) 暮(8) 月⑦ 名の 月③ 月② す (5) À 冬 ① 四時部 四時部 四 四時部 四時 |時部 部 冬至20 冬興(2) 歳暮郊 歳暮② 初冬20 (注八

千載 :佳句と古今六帖の細部にわたる類似を列挙することに す

る。 古今六帖の「春、 に相当するもの 夏、 秋、 冬」は干載佳句の 一致をみると「四時部、時

は天暦年間とされているが、千載佳句は金子彦二郎氏は

|郎氏は延長三年

の撰とさ

'n

Ш

П

| 久雄氏

てくるのである。

わ

れるのである。

漢籍からの

直接の影響を受けた和

歌書の存在 たものと思

ういう類

の上に立ってその部類意識

は働い

てい

を肯定する以前の問題

として「漢籍

日本に於ける漢詩文

和歌」へと段階的な歩みを肯定することの方が先決問題となっ

成立である。

この千載佳句を矢面に古今六帖の部立意識をみて

古今集撰進後、

後撰集の時代迄の

節部 いっ

である

が

ほとんど完全な一

てい、であろう。

2

らを除いても全体の七十五パーセント以上の類似を示しているものである以上やむを得ないものと看做し得るのである。それくら④」に相当するものは見当らないが、純日本的、和歌的な草⑧、水無月⑨、なこしの祓⑩」、「冬」部の「神無月②、か「夏」部の「更衣②、卯月③、うの花④、神まつり⑤、あやめ「夏」部の「更衣②、卯月③、うの花④、神まつり⑤、あやめ

「青髯③」こ、「돌り月③」以下「盲月①」までは「月①、瓜「天」部は「天象部」に適合する。「天の原①、照日②」は

次に「田、野」は千載佳句の「遊放部」にその

細

間目は

見出せ

ことは驚くべきことである。

あられ③、こほり②」は「雪夜⑭、氷⑲」に適合するものであ❷」は「暮雨⑥」に適合する。更に「雪⑳」は「雪⑨」に、「南㉑、村雨㉑、時雨辺」は「雨④、風雨⑤」に、「ゆふたちに、「春の風⑭」以下「雑の風⑭」は「風月②、風雨⑤」に、「夕やみ⑪、ほし⑫」は「夜⑭、閑夜⑮」「晴霽⑧」に、「春の月③」以下「有明⑪」までは「月⑪、風「晴霽⑧」に、「春の月③」以下「有明⑪」までは「月⑪、風

> ったこと、一緒に後述することにする。 はばならないだろう。「天」部に於て一群をなして関連しなかではその一つも関連性をもたないのは注意を要すること、云わということができる。しかし、「そま⑮」以下「むまや⑭」まに」は見出せるものであることは、類推を許される言葉である載佳句の詩中を見るに、「山どり、さる、鹿、いはほ、峯、た載佳句の詩中を見るに、「山どり、さる、鹿、いはほ、峯、た

載佳句の「遊猟」に相当しないこともないのであるが。田④」があり、「野」部に「春の野①、以下最後迄は相当するものである。その上「田」部最後の「かりほ⑤、いなおふせ鳥⑥、その野④」があること、「遊放部」に「春遊③、夏遊④、秋遊⑤、冬遊⑥」があること、「遊放部」に「春遊③、夏遊④、水の野④」があること、「遊放部」に「春遊③、夏遊④、るの野④」があり、「野」部に「春の野①、夏の野②、秋の野③、との日かも「田」部に「春の田①、夏の田②、秋の田③、冬のる。しかも「田」部に「春の田①、夏の田②、秋の田③、冬の

境⑱」にあてはまる。「田舎」部は「宮俊部」に「やど⑤、やどり⑥」は「亭④」に、「かきほ⑦」は「阳宅③「田舎」部は「居処部」に相当する。「古郷④」は「旧宅③「都」部は「宮省部」の「禁中①」に相当するものである。

が、「庭⑤」以下該当するものが見当らないが、之も後述する水楼⑧、水閣⑨」に、「まがき④」は「隣境⑭」に相当する。宅①」に、「となり②」は「隣家②」、「井③」は「水亭⑥、「家」部も同じく「居処部」に相当する。「いゑ①」は「居

「人」部に於ては千載佳句の「人事部」が相当する。「おき。にっる

ま①」以下「山ひこ⑫」までは「山水①、

春水⑤」に相当するものである。

「天」部同様にして千、山中②、泉③、曝布

古今六帖「山」部は千載佳句の「地理部」に匹敵する。

ーや

水

おや③、 はまる。しかし、「くるま⑥、うし⑦、うま⑧」は相当するもの ることによって和歌類聚書としての古今六帖を位置づけている ることによって、というよりもむしろ恋・思を他の部に区別す あるが、どの類聚書にも見られなかった部を一部として区別す が見当らない。「人」部は歌数合計四十二首しか存しないので な①」は「老镠、老人邸」に、「をんな②」は「美女❸」に、 うなひ④、わかいこ⑤」は「兄弟⑳、外孫㉑」にあて

ものと考えられる。 「仏事」部は「釈氏部」にあてはまる。 禅居②、僧房③」に、「ほうし③、 あま④」は「禅僧④ 「寺①、 鐘②」は「

ころである。

「地理部」の「山水①」に。「をし③」以下「かはつ⑭」迄の処部、遊放部」との類似が認められる。「水①、水とり②」は 一に相当する。 古今六帖第三帖は「水」部である。千載佳句の 地理部、 居

漁⑭」に相当する。 泛舟⑬」に、「つり⑭、いかり⑪、あみ⑭」は 十項目は群をなして該当しない。「ふね⑱」は「居処部」の「 にあてはまる。「にはたつみ⑳」以下.「しほがま⑳」まで合計 らみ②、 の「橋⑮」に、「ひ⑱、ゐせき⑲」は同様「渠⑮」に、「しが 合計十四項目は合致するものがない。「はし⑰」は「居処部」 「池⑪、秋池⑫」に、「たき⑱」は「地理部」の「曝布水④」 まらないのは注意すべきである。 夜川②、 網代❷、やな❷」は「遊放部」の「漁⑭」に いけ図、ぬま図、うき図」は「居処部」の 「なのりそ⑭」以下最後迄合計十八項目は ともに群をなしてあて 「遊放部」の「

まらないものは後述することにする。

古今六帖に於ける「水

のである。

に関する全てを網羅しようと試みたのではなかろうか。 白氏六帖との関係は巻第二、第三が指摘されているが、

部は地理的なものから漁としての性質を有

するもの、

更には

水草類をも含んでかなり連想性に豊んだ部だといえる。

羅列することによって古今六帖そのもの、目的を明にしようと 氏六帖の連想性と古今六帖の連想性とには相当の開きがあっ したのであり、 しっくりゆかぬ。その点古今六帖の編者は水に関係ある事項を 古今六帖の作歌参考書としての性格も頷けると

の部で詳述することにする のが見当らない。このことは注目すべきことであって、「雑思」

第四帖の「恋」部は千載佳句の中にはその一つも相当するも

し④」も純粋に和語である。 謝恩⑫」に相当する。こゝに於ける「わかな②、つゑ③、 「祝」部は千載佳句の「人事部」に於ける「慶賀⑰、感見⑱、

ものではなく、便宜上もってきたとする説は妥当と思われる。旋頭歌⑨」が入っているが、これは「別」とは必ずしも関係ある 当する。この「別」部の中に「長歌⑥、小長歌⑦、古き長歌⑧、 うでないにしろ、恋情をもったものとしての性質には違いはな れるように「思」は「恋」の前段階的なものであるにしろ、 れ①」は「別意①」に、「ぬさ②、たむけ③」は「餞別④」に、 「たび④」は「行旅⑩」に、「かなしひ⑤」は「旅情⑫」に 次に、 「雑思」は「人事部」に相当する。久曽神昇氏が論じておら 「別」部は「別離部」にあてはまるものである。「わ 古今六帖が恋と思とを区別したことについて山本 か

れるからである。「別」までみてきた千載佳句と何らかの誘引によって古今六帖の細目の中に入っ てい され 相聞 それのみに のであろうが、六帖にみられる『雑思』の分類はか て頗る微妙であり、 して区別されたことは事実である。 歌との内容的相違には問題が存すると思ふ U 12 みる必要があるのではなかろう その源順 変遷推移の実情を物語っているものと思はれる。 .古今六帖と白氏六帖との比較に於てみられなかっ のうたをひらきてくはしくのふるに は此 る は万葉にも春雑歌秋雑歌なと有て相 は 0 標 す ح **此ふみも** 集との関係を強調しておられるが、このことも源順集 なはち恋なり古今より己下すへて恋の 注 |頼る以前の問題として「雑思」 の点に関しては平井氏は前掲論 は 恋のうた第四第 第五帖にまた雑思ありこは 従って自然に『恋』 か。 五にわたらせ 斯様な区別は実際問題とし というのは先にもみたよう 似 にも統 たり 聞 文の が、 0 第 の細部を見わ 歌 四帖 外はみな雑歌とす たるにや」と云っ とにかく歌題と 中で「恋歌と思 歌五巻六巻あり は恋をもと、 、る されて行った 0) ていると思わ のさふの と述べて、 比較に於て たものが、 過渡 たして 期 お

は明になってくることである。

雑 思															大部	古																
人をまたす	人をまつ	近くてあはする	t t t)) :	よひのま物	うちきてあへるの	遠道へたてたる29	としへたてたる29	ひころへたてたるの	物へたてたる②	二夜へたてたる20	一夜へたてたる四	あかつきにをく個	ふせりの	ふたりをりの	ひとりねり	よるひとりをりゆ	人にしらる、邸	人しれぬの	いはて思ふ⑪	わきて思ふの	こと人を思ふ⑨	あひ思はぬ®	あひ思ふの	し め ⑥	あ し た ⑤	はしめてあへる④	としへていふ③	いひはしむ②	し ら ぬ 人①	細部	一十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二
人事部	,	人事部	人事音	S B	天象部	人事部			月	し 事 郡			別離部		1	軍形						人事部				天象部	人事部				大部	千載
# 35 35		不遇友(3)	図画の	草 書(4)	夜(3)	過友の			#	圣			暁 行(2)	開 適(2)	閑 放印	閑 意(4)	閑 居3				憶遇友29	憶 友谷	憶兄弟(1)			晚(3)	遇友の				細部	佳句
	_				-	-	_				•		<u> </u>				=															大部
																																1 48
か た みの	こんより	今はかひなし日	になき思いの	かくれつまの	わかせこの	わきもご飼	な き な 8	おしますの	なにをしむ90	といまらず弱		人をと、む野	くれどあはずの	思ひわつらふの	•••	•••	めづらしの	人をたつぬの	ち き る 弱	あっらふむ	むかしあへる人们	むかしをこふの	思 ひ つ い39	おとろかす3	心かはるの	忘 れ す 188	わするの	ひとつて39	ふみたかへ③	道のたより図	人をよぶの	細部
た	ん よ 60	はかひな	なき思い	くれっ	かせ	* 6 C G 9	ŧ	しま	にをし	いまらず	人事部	を と 、	どあは	ひわつら	•••	•••	づら	た つ	き る	つら	かしあへる	かしをこふ	ひつい	とろか	かは	n	す	とって39	みたか	のたよ	ا ا	細

を欠いたものではあり得 としては多数見受け 語としては で、 |句の完全なる踏襲では 千載佳句 使 られるものであって、 用 Ō 人事部を翻案したも ていなかったも ないが、 その中には「あひ思ふ 恋 歌題としての妥当 のもある の推移過程 のとしての を追 部 物 立 語語語 つ 性

以下「いはで思ふ⑪」までや、

ないのである。

る恋の部の内容と同

の性格をもっ

更に又疑問

に思われるの

は「恋」と「

雑思」が

第四

帖

٤

Ŧi

性

0

は

ともなことだと思

われる。

雑思」 ているのであ

自体

が

勅

撰集 はまら 恋と思に

於け

V) もっ てその

区別を論

じておられることが明確にあては

ならないだろう。

古介六

帖に於ては、久曽神昇

氏

於ける恋の部の配列意識について指摘されているのと同じようもってきたり、かなり類推的な配列を行っている。又古今集に ら「思ひわづらふ図」までのように状態を羅列したり対句的 に、古今六帖に於てはその細部にわたる部立自体に恋の前期から 「めづらし⑮」から「口かたむ⑱」まで、 「ふせり⑰」、「一夜へだてたる⑲」以下「遠道へたてたる⑳」、 さらには 「今はかひなし〇、これよ〇、かたみ〇」 更に「人づま⑭」か 又古今集に ٤,

ないことである。 ついても面 1的感じがしない 以上が「 恋の外これらの歌題自体が当時迄 面影④、 「雑思」の部立であるが第四帖に出ている「恋」 百つい事 転寝⑤、 いでもな しかしこれら 実にぶつかるのである。 61 恨⑦」は歌語としての成熟度は大き つまり古今六帖 0 歌題は歌合そ の歌合の中にも認められ 恋①、 の編 の他に於ける題 者 が 雑 0) 思

そ

0

破滅までを並べているのであ

「よるひとりをり⑭」から 類 部 に 推 V3 れる。 雑 下十一項目は共に一 げ①」以下合計二十八項目、 として「 格となっていたの である。 帖に離れていて、 そ ₺ 度部下」、更に「 ではなかろうか。 散らばりすぎていて何を基準 今六帖と和名抄、 0 である。 含めなけ 明にされ の部が恋、哀傷の次に位置したこと、関係 れは巻第二、 服 琴頃、笛四」に相当するのみで、それより前の 飾 類聚書としては雑の部が哀傷の次に来ることが一つ 、ふみ剱、こと釼、 ふえ釼」 「雑思」が 雑思」を「祝、 部 れている n は ばならないことになってくる。 四、 千載 その中に「祝、 が、 ではなかろうか。その雑の部 |巻第四装束部」を含め、 和名抄に於ては「 更には白氏六帖との比較は平井氏 群をなして合致しないのである。 九 佳句との類 祝、 その内容は和名抄も白氏六帖も 十六、十八、十九、二十五、 別」の後に位置させたと解釈したい 別」の後に来ていることは 更にはそれより後 に聚めたもの 似は極めて少く、 別」が挾み込 が「人事部 巻第五調度部: か見当が 白氏六帖 が この「ゆ 宴喜 に相当するも あるように思 ま 連 n 辶 ってい つ 0) 続 かな д 33 する に於ても 帛 あ しかし古 「玉くし 古 いまり 一文の 今 ること

拡

てい

るの

である。

古今六帖の編者が和

名抄もしく

は白氏六

0)

中

として第五帖にもっ

てきた

に細目

は千載佳

句

Ď

人事

部

より

の

句撰、詩句撰が多数存在していたことも考えられるからである。の影響が頗る大きいと思われるからであるし、千載佳句的な佳というのは「雑思」までみてきたように、古今六帖は千載佳句ないのであるが、あまりにも飛躍にすぎた感がするのである。

だけ拡っ

ている項目を一

括したと考えら

れないことも

続本朝秀句三卷 法姓寺大閣本朝佳句 二帖本朝秀句 五卷 藤原明衡撰日本佳句 二帖

朝書籍目録の詩家の条をみると、

統新撰秀句三卷 華家公撰 当世麗句 二卷 新撰秀句 三卷 長方鄉撰 古今詩鈔 十卷 新撰秀句 三卷 藤原周光 近代麗句 十卷

いたのではなかろうかと思われる。れるし、千載佳句式のものであって或程度の影響関係をもって

があるが、これ

らの部

類

でも或程

度の進展を示していたと思わ

統本朝佳句

千載佳句との適合は認められない。 「色、錦綾」の部も「服飾」部同様の観点に立つものである。

べきことである。

②」「はちす匈、かきつばた匈、こも匈、花がつみ匈、あし匈、うの草⑦」「らに匈、きく⑮」「しをに匈、くたに匈、さうひ夏の草②、秋の草③、冬の草④、したくさ⑤、にこぐさ⑥、ざ夏六帖の「草」部は七十項目の中類似するものは「春の草①、

の「水草①、 ぬなは③、 「山ぶき®」 水草①、 雑花③、蘭菊②、 ねぬなは3、 木蓮⑴、 以下「をぎ⑭」迄、 水芙蓉⑫、辛 あさ、③」が千載佳句「草木 菊(30)、 牡丹筠、 夷⑪」に相当する 「くさの 薔薇②、 かう切し

き草翎」以下最後迄はいづれも群をなして合致しない。から「りうたん⑭」まで、「かるかや翎」と「かや翗」、「う

大成』の中から拾ってみると次の数を得るのである。
ける草に関する歌題を正暦年間迄を、萩谷朴氏の『平安朝歌合草を並べたことは意義深いこと、云わねばならない。歌合に於又その数も増しつ、あった時代背景より考えて、これ程多数の歌合に於ては前裁合が多くなり遊戯的なものに変化しつ、、歌音に登し上、資名美しいで、書きて、

紫苑— 十一回、 夏草—三 菊—五回、 三回 薄—七回、 回 刈 萱—五回、 草のかう=三回、 山吹=三回、 花薄—一回、 紫蘭= 撫子=九回、 きちかう== | 篠—一回、 回 浮草——一 萩=七回、 荻—二 回、竜胆—三回 回 口 款冬= 蘭

含まれていて、 みくり=一回、 回 このように歌合に於ける題目の全ては古今六 きこく― | 卯の花=五回、 回、さるとり=一 その他多数の草名を羅列していることは注 菖蒲—二回 回 Щ 橘| 回 帖 Щ 0 項 | | | | | | | | | É 0) 目 中 i す

の題目を検討してみると、(草部と同様にして) 少なくとも存したことは考えられることであり、 るものであるが、 題は一つも見出せない。 次に「虫」部であるが、これは千 今日佚している漢詩句集の むしろ白氏六帖の -載佳, 句)中に多数 Ď 中に 中にこういう部 と同 は 類似 見受けられ する 歌

虫—一回、 せることより 回 叢の虫=一 日ぐら 蟬—一回、 して、 Ĺ |-回 夏虫—二 回 負態虫—一回 部 蛍=五回、 П でみたの 蟋蟀=三回 機織女=二 秋の虫= と同様に 松 古今 虫 回 Ī ·六帖 虫の 等が

を考え得るのである。性格を物語っているのである。又時代的産物としての古今六帖性格を物語っているのである。又時代的産物としての古今六帖

「木」部は「草木部」に該当する。

こうばひり	む め (3)	(1	たかんなる	た け (1)	η, (i)	松 ⑨	か へ て ⑧	まゆみ⑦	は ・ そ ⑥	紅 葉 ⑤	あきの花④	は な ③	し を り ②	* ①	古今六帖
梅柳④	梅 ③		吃竹	松竹的、竹切	松 柳 (5)	松 19			昔 も う		翫 花 ③	花樹翎		水 討 ②	千載佳句
くる み ③		からも、③	す も、 29	t		ぎ く・ ・ ・ ろ の	•••••	た ち 花	ふ 5 2D	ひさくらぬ	山さくら倒	花さくら®	にはきくらの	さく ら ()	柳 (15)
杉 村 (7			棚(6)			山柘榴⑧	-		藤 22			桜棚の			柳 ⑤

注目すべきである。虫」部同様歌合題目の中にこの古今六帖の項目が見出せるのは虫」部同様歌合題目の中にこの古今六帖の項目が該当しない。「草、なし図」、更に「すぎ図」以下二十四項目が該当しない。「草、こゝでは「たち花図、あべたち花図、しゐ図」や「なし図、山

的漢詩句集を類推し、それに対立するものとしての古今六帖をるかに大きいと云わねばならないようである。しかし、千載佳句六帖との比較は巻第二十九であるが、白氏六帖との適合度がはが「禽獣部」の「鶴①、猿鴈②」と相当するのみである。又「ら「かひ④」迄は合致しなくて、わずかに「つる⑤、かり⑥」ら「かひ④」迄は合致しなくて、わずかに「つる⑤、かり⑥」を侵に「鳥」部は千載佳句との類似性は極めて少い。冒頭か最後に「鳥」部は千載佳句との類似性は極めて少い。冒頭か

考えるべきであろう。

最後に「山、田、野、家、人、雑思、恋、服飾、色、錦綾、最後に「山、田、野、家、人、雑思、恋、服飾、色、錦綾、青が。

るとい

える。

.

今六帖の編 者の方が妥当 まったの 録を作って行ったのであるが、 たのだろうか。 うでないにしろ) るのであるが、 ら」を加えると二つ増えて丁度二倍ということにはならなくな 中に含まれていないのは何故だろうか。「火」と「かにはざく と第六帖 百十六門あるのは何故であろうか。五十八門ある。しかるに古今六帖の 載佳句そのものを意識していたことになるのである。 とする根 古今六帖と千載佳句との関係についてその相関関係を強 -\歌参考 か。 木 拠に項目数 者の 書に対するも 一のように 古今六帖と千載佳句の部立の類 の部 しかるに古今六帖のそれは題目録によると合計五 意識 或は又、 目録を作る時に 或はその数を二倍にする為に書き入れなかっ 0) にある「かにはざくら」とはこの がある。 中には千載佳句という当時 思われる。 千載佳句の項目数は意識になくその目 のとして入っていたということがで 千載佳句 本当に偶然にも二つを忘れてし (目録が後人の補入にしろ、そ とするとこの編者は完全に千 第一帖「天」の部にある「火」 Ď 細部 前の項目 似から考えても前 の作詩参考書 は 位固なも 題目録の 合計二百 つまり古 0

> 3 田 ② 、 と隣接する歌題は千載佳句の「居宅①、隣家②」と隣接する詩 が順序正しく配列されている。 冬の野④」に対して、「春遊③、 秋の田 一帖では 田 冬の田④」と「春の野①、 の部 で見たように、 「家」部でも「家①、 夏遊④、 夏の野② 秋遊⑤、 0) 田 隣2 1 冬遊⑥ 秋の野 夏

を保っているのである。かなしび⑤」に対応する詩題の順序は入り乱れることなく順序がなしび⑤」に対応する詩題の順序は入り乱れることなく順序第三帖の「別」部に於ても「別①、ぬさ②、手向③、旅④、せるものである。

3

題と非常に類似している。「仏事」部でも「寺①、

鐘 ② 、

あま④」という順序はそのままの順に千載佳句の中に見出

順序に一致するのである。⑤、かり⑥」は千載佳句「禽獣部」の「鶴①、猿鴈②」という第六帖の「鳥」部に於て唯一つ類似しているところの「つる

期から え合せるならば、 せ 順 ず、 これを古今六帖と白氏六帖の順序を追っ 第五帖 入り乱 中期更にはその末期へと段階的配列 雑思」に於て千載 れているのは古今集以来恋の部 当然のものと思わ 佳句 0) れる。 「人事部」 てみると、 をしていることと 0 配列 との が、 順 そ 序 0) 恋 が 開 0 致 ŧ

なっていて、簡単に古今六帖の配列を類推できる?第一卷 天地日月星辰雲雨風雷四時節臘

第

0)

'も同様である。

河順 天

部でも同様で月から風

う

配列

序

はその過

程

に於て類

似

性

上をもっ

て

風から雨

べて行きその

間に行事を挿

入したという点に於ては千

冬」の部

はその季節

0)

初

から

暮まで

巻は

の大きなことに気付くのである。

例えば、

四

]時に相当

する第

では

なかろうか

43 ح なっ Ł 0) てい بح 思 て、 b n 簡単に か 古今六帖の配 ŧ 白氏六帖の 列を類推 細 目は できるもの 七〇〇門 以上存 ではな

卷二十七、 等の関係ない巻も存するのである。 卷八、卷十三、卷十五、卷二十一、卷二十二、

ある。

更に何かの要求により後半に添加されたものもある。

論じておられることであるが、今迄の論を総括して「世」三、本議住句自体が漢籍の影響を受けていることは川 千載佳句 古今六帖」という影響関係のルートを提起するこ 今迄の論を総括して「漢籍 口 久雄氏が

結 語

とができるのではなかろうか。

左 0 以 パーセンテージを得る。 上みてきた古今六帖と千載 佳 句との類似を総括してみると

古今六帖細項目数=五百十六(「火」「かにはさくら」を除く) ・載佳句との適合数=二百二十二

百十六あることより、 更に又千載佳 とが明らかになったし、 こには は少しも見当らない「雑思」の部が千載佳句の人事部との比較 えば八十パーセント以上の類似ということになる。 によって明らかになり、 各部によってその適合度はかなり違っているが全体で四十三パ セントの類似がある。このことは逆に千載佳句の立場からい のが 似性 「恋」と「雑思」とのはっきりした違いが生じているこ !強く入っていたと思われるのである。 |が強いが、後半はそれが弱いことが明らかになった。 一句の詩題が二百五十八であり古今六帖の歌題が五 古今六帖の編者の意識の中に千載佳 古今六帖の各部に於て前半は千載佳句 恋 部との対称を考えてみると、 白氏六帖に 圧句そ そ

本論でみてきたようにその細目は漢語を和語に翻案し その間 間にあ 7 連想により各部に適宜挿入したもの たもの

> 千載佳句の詩題が二百五十八ということもあったであろう。 の何かは恐らく歌合という題詠歌のもつ性格であったろうし、 最後に古今六帖の題目録の冒頭についてみてみると 古今和歌六帖題目 録

第一 帖

歳· 時部・ (施点筆

春立日 む月 ついたちの日・・・・・・

襲していたのかもしれない。 を設けて或は十五部に統合され、 ここで臆測が許されるならば、古今六帖も「歳時部」的な大部 相当する記載が存在しないことは何を意味するのであろうか。 とある。しかして第二、三、四、 Ŧ, 完全に千載佳句の部立数を踏 六帖にはこの「歳時部」に

者を考える時、 として一言のもとに葬り去られてしまうかもしれない、 考えてみたしだいである。 の変遷期にあった産物としての古今六帖を認識し、 甚大であると云われてきたのに対して、 に立てば幸である。 千載佳句との比較を試みることにより、今迄白氏六帖 もしくは成立年代を考える時何らかの あるいは古今六帖のもつ一つの性格 より以上に漢詩と和歌 その役割を 方法 の影

注

年七月 「白氏六帖を媒介としての古今六帖私考」国語と国文学 昭和三十

諸説あって一定していない

Ξ 川口久雄氏『平安朝日本漢文学史の研究』による

四 五 『平安時代文学と白氏六帖』第四章第六節「千載佳句成立の年代」 『平安時代日本漢文学史の研究』第十六章第二節「大江維時と日観 千載佳句」

六 七 内閣文庫乙本・松平文庫本は「三月イ三日」とあり、 内閣文庫乙本は「八月イ十五夜」、上野図書館本は「八月十五夜」 は 「三月三日」とある。内閣文庫甲本は「三日」とあるのみである。 上野図書館本

古今六帖細部下の数字は各部に於ける順序を示す。千載佳句細部下 内閣文庫甲本と松平文庫本は「十五夜」となっている。

八 の数字も同様である。

山路平四郎氏「古今和歌集の部立について」 平井卓郎氏(注一)に同じ。 文学 昭和二十二年三月

0 九

福田良輔先生「古今集和歌の一排列基準としての美意識」台湾 昭和 小沢正夫氏「勅撰集の部立の研究」 国語と国文学 昭和十六年四月

十五年六月

古今六帖の編纂時代が諸説ある中で最も時代の新しい山田孝雄氏の 説を極限と考えて仕事を進めたものである。「古今六帖覚書」日本 大 学

寛文九年板本による。 国文会誌 六帖によると、契沖本によって「火」「かにはさくら」は補ってある。 語文 **氷**一輯 山本明清の標註本と石塚龍磨の校証古今和

千載佳句」

『平安朝日本漢文学史の研究』

オ十六章オ二節「大江維時と日観集

正岡子規 受贈図書 地球儀・天球儀 昭 ·和40年6月~12月

天理図

国立国語研究所年報 近代文学選 近世文芸資料と考証 (三十八年度 Ţ۷

類義語の研究 共通語化の過程

近代文学と仙台

奈良時代東国方言の研究

日本文学の自然観照

天地のはじめ 保険百歌

創立三十年記念論文集 連愚腰折集 和漢古書分類法

逐次刊行物目録

(37年度)

(文理篇)

おあんはなし おあんはなし」 (抜刷) とその言語

日

徳川家康公伝

光東照宮社務所 国立国語研究所 学 天理図書館 友

国立国語研究所 国立国語研究所

福田 良輔

日曜随草社

伊吹 瀬古 高吉 確

前園 長沢規矩也 直健

国立国会図書館 宮本 岡 大 八郎

福

吉野 吉野 忠

忠